東北歴史博物館館長講座概要　　2021 年 7 月 24 日

「東北グローバル考古学―宮城の先史を再発見―」④

氷河時代のハンターたち

阿子島　香

はじめに

館長講座 4 回目は、後期旧石器時代の人々の暮らしについて、環境への適応と移動生活、生業経済そして技術の特色という面に焦点をあてて考えます。東北地方の遺跡と西ヨーロッパの遺跡（次回講座）を対比しながら、比較文化的視点から時代性ということを考えてみましょう。仙台平野周辺の遺跡（富沢、山田上ノ台、上ノ原山、野田山ほか）、山形県新庄盆地周辺の遺跡（上ミ野 A、高倉山、白山 E、白山 B ほか）、南西フランス・ピレネー山麓の遺跡（ドゥフォール岩陰ほか）、北フランス・パリ盆地周辺の遺跡（パンスヴァンほか）を取り上げ、スライドで紹介します。

旧石器人のイメージ

旧石器時代はまた氷河時代でもありました。この時代に対して、一般には昔から Cave Man のイメージ、寒冷な震える気候、洞窟の中の半裸の人々、火のまわりで暖を取る姿、粗末な石の道具、襲いかかる猛獣、のようなイメージが根強くあります。果たして実際にそうだったのでしょうか。現代考古学は、まるで違うイメージを提供します。現在でもありえそうな、洗練された姿の狩猟民、仕立てられた皮製衣服、複雑な工程で製作された装備品、大型動物の群れに対する、整然とした集団狩猟、獲物や資源の社会的分配、滞在地キャンプの家族生活、弓矢こそ存在しませんが、強力な投槍器の威力、熟練の技と自然への深い知識、計画的な季節的移動生活と、このように挙げてきますと、ホントかな、どうして分かるの？　となりそうです。

まず前回とのつながりで、日本列島に到達したホモ・サピエンスが発達させた文化的特色に関連して、事例で説明しましょう。円形のムラという復元画が描かれることが多い「環状ブロック群」の長野県日向林 B 遺跡、秋田県地蔵田遺跡です。以前は地蔵田 B 遺跡と呼ばれていました。弥生時代前期の集落として有名で、地元では「弥生っこムラ」という名で大事にされていますが、その下層の文化です。秋田市による出土品再整理事業で、東北大学の鹿又喜隆教授が使用痕分析を実施して、石器が対象に命中したときなどに生じる衝撃剥離痕や各種摩耗光沢を検出しました。環状の石器分布と使用痕から、大型動物の狩猟活動との関連が示唆的で、興味深い事例です。

磨製石器と落とし穴も、日本列島の新人文化に特徴的です。石斧の刃部などに研磨して

仕上げる局部磨製石斧は各地で見つかっています。石器の基部にあたる部分を整形加工した、台形様石器、台形石器、ペン先形ナイフ（これらの型式分類と変遷は学会でも議論になっていますが)、祖型の石刃石器（石核の調整加工が未発達)、などと、石器組成を構成します。福島県会津若松市の笹山原遺跡群の事例を見てみます。笹山原 No. 1 6 遺跡は、郡山女子短大の会田容弘教授が継続的に調査しています。福島県立博物館の企画展「発掘ガール」で登場しました。この発掘調査には東北大学考古学研究室が、もう 20 年近く協力を続けて一緒に研究してきました。

落し穴遺構は、静岡県初音が原遺跡での検出が有名です。尾根上の地形に規則的に並んでいます。鹿児島県（種子島）大津保畑遺跡も、3 万年前にさかのぼる古さです。縄文時代には普遍化する落とし穴猟が、いつ始まったのかを知る重要な知見です。居住様式との関連では、放浪や遊動とは違う、回帰的移動や滞在が示唆されます。

そして、後期旧石器時代の前半と後半を時期区分するにあたって重要なのは、AT（姶良丹沢）火山灰です。これは約 26000～29000 年前に、鹿児島県の姶良カルデラから噴出して、日本列島の旧石器文化に大きく影響を与えた事件、人間の視点からは大災害でした。列島に広く降下した広域火山灰で、遠く朝鮮半島でも検出されるほどです。日本の旧石器文化の「編年」では、テフロクロノロジーが鍵になります。AT を基準にして時期を二分することが多いです。

後期旧石器の「革命」

前回講座では、日本列島で現生人類（新人）が、いかに高度な適応能力を獲得していたか考えてみました。冒頭の対比は、実は原人と新人の進化レベルの差を反映したイメージと言うこともできます。アメリカの新進化主義人類学学派のレスリー・ホワイト（ミシガン大学）は、文化とは人間の環境への適応手段（身体外的適応システム）であるとしました。ホワイトは、文化システム・サブシステム論を講じて、ビンフォードの理論的な師にあたります。また同系統の学派のジュリアン・スチュワードは、環境と人間集団の関係を重視する「文化生態学」を提唱しました。一方、イギリスの旧石器研究の泰斗クライヴ・ギャンブルは、後期旧石器時代の開始は人類にとって「革命」であると論じました。これらの理論的な背景とともに、後期旧石器時代の生活と石器技術を見直してみましょう。

約 180 万年前からの更新世は、氷河時代とも言われますが、おおよそ 10 万年～10 数万年の周期で、寒冷な時期（氷期）と温和な時期（間氷期）が、規則的に繰り返していました。標準曲線グラフで見るように、深海底から採取されたサンプル（コア）に含まれる、有孔虫化石の酸素同位体分析で知られます。次第に寒冷化が進み、氷期最盛期となり、氷期の終わりには急激に温暖化してくるサイクルがありました。約 13 万年前からの最終間氷期には、現在の地球以上に温暖になった時期もありました。このように寒暖を何度も繰り返してきた地球でしたが、人類の進化はそれぞれの時期特有の段階的なものでした。環境が人類進化、また文化進化を決定するのではありません。最終氷期の間に新人の全地球へ

の拡散を伴う「後期旧石器革命」が起きたのです。

後期旧石器の型式学で把握される年代的、地域的な細かい変化は、それ以前とは全く異なる文化的な現象です。この現象により石器の詳細編年が可能になります。５月の館長講座で取り上げた原人のハンドアクスでは、汎ユーラシア的な斉一性、そして数十万年オーダーの継続性を示していました。石器に見る変動は、人類が象徴的思考を行い、思想を持ち、芸術も作り出した「後期旧石器革命」の、一つの典型的な現象といえるでしょう。集団の組織、季節認識と将来の計画性、生活様式としての移動など、多くの面で革新が起きて、結果、現生人類の環境への適応能力は、飛躍的に高度化しました。極北の厳寒の土地などへも極限的な人類拡散が起きて、また海はもはや移動の障害ではなくなりました。前回講座で、日本列島では４万年前より後の文化様相を基準にして、それ以前の遺跡遺物を評価してはいけないという解説を行なった次第です。

「円形のムラ」と民族考古学

狩猟採集民が滞在するキャンプが円形を呈する事例を見て、民族考古学の方法論に関して考えてみましょう。アメリカのイエレンは、南アフリカのブッシュマン（サン諸族）の現代の遺跡を克明に調査して、『現在への考古学的アプローチ』という学史上も画期とされる著作を発表しました。1978 年のことです。1970 年代には世界的に、伝統的な生活の文化変容が進み、民族考古学の知見を集積していく研究にとって、いわば瀬戸際的な時期でした。ブッシュマンのキャンプでの小屋と行動空間、火の使用場所、そしてナッツの殻のような廃棄物の分布などを、考古学的に調査して、一般的な法則を探る方法を模索しました。「リング・モデル」が有名になりました。それは、中央に公共的な場があり、周りを滞在小屋が囲み、周囲に活動空間が広がるというモデルです。私たちには「環状ブロック群」を考察する際に示唆的です。

このような研究例でも分かるように、民族考古学の方法論に対しての大きな批判点として、個別の民族の事例が、どのように普遍的な解釈基準になり得るかという議論が、ずっとあります。当然の批判ですね。ビンフォードは、多くの事例を集積して、いわば人類の経験の集成から、法則的な一般化にすすむと考えます。それは、さまざまな人間行動と、その結果として残される考古資料の両者をつなぐ、いわば橋渡しのための「辞書」を編纂する行為に例えられるだろうとします。ミドルレンジセオリー（4 月館長講座）という立場からの反論と言えます。

石刃石器群の人類史的意義から

東北地方の石刃石器群も、グローバルには最終氷期の最寒冷期における新人の文化的適応として評価されます。薄手で長く、鋭い刃部を持つ石刃は、そのままで効果的に使用されるほかに、彫刻刀やスクレイパーなど、各種型式の石器に調整加工されました。この時代は世界各地で、特に中緯度地域で石刃石器群が卓越して現れます。西ヨーロッパでは、

オーリニャック文化、ソリュートレ文化、マドレーヌ文化という大別と、さらに細別文化期の石器が、詳細に分類されていて、100 以上の石器型式分類と、地域的な変化が緻密に研究されてきました。

後期旧石器の地域差と年代差が顕著なのは、日本の東北地方でも同様です。そのような現象は文化遺物のスタイル差でもあります。何らかの人間集団の差が、実際に装備の差異として反映されている「集団表象」とも考えられます。数百年という短期間（考古学的時間）で石器形態が変化し、また地域差が細かく表れます。時に広域的な分布ゾーンからは特異的な石器群が出土することもあり、人間の集団について考えさせることになります。たとえば、新庄市上ミ野 A 遺跡では、同じ層準（生活面か）から、東北的な東山系石刃石器群と、西日本的な様相をもつナイフ形石器群が、平面分布で分かれて出土しました。

石刃石器群は、同じ量の良質の原石から、より多くの有効な刃部を作出することができる優れた技術でした。換言すれば、それは計画的な滞在地移動という生活様式に適合する技術でもありました。石器の製作技術も高度化、熟練化しますので、より最適な原石石材を、遠方から調達するという現象も、世界的に認められます。広範囲の移動と特定の材料調達が、セットになっていたようです。このような技術の組織化の様相は、人間集団の適応様式のタイプと関連させて考察できます。

ビンフォードは、石材採取の「埋め込み戦略」embedded strategy について論じています。言葉はあまり日本語になじまないように感じられますが、狩猟採集民が広域を移動する生活を送るなかでは、わざわざ石材だけを目的に移動して採取するよりも（もちろんそのような行動は、採掘場所のように多くの事例にありますが）、ついでの収集が多いと指摘します。食料資源の獲得をはじめ多くの収集活動は複合しており、その中で原石に出会えば集めるなど、人間活動の複合性を指摘しています。考古学者は、資料に基づいて研究していきますが、常に直接には見えないものを想定しつつ、考察していくことが大切と言えます。石刃石器群に話を戻しますと、出土石器の石材の原産地の範囲は、人間集団の行動領域と関連がある可能性を考えることに通じます。

宮城県内の後期旧石器時代遺跡

宮城県内には、現在 82 カ所の旧石器時代遺跡が確認されています。そのうち発掘調査が行なわれた遺跡は 31 遺跡になります。このような最新で、かつ正確な集成が、宮城旧石器研究会により行なわれているので紹介します。宮城県考古学会旧石器部会という位置づけになっている研究グループで、加美町（旧小野田町）の薬莱山麓遺跡群出土資料の再分析（宮城県考古学会の機関誌『宮城考古学』で 4 編の成果発表）など、地道ながら非常に高水準の研究活動を継続しています。2018 年には『宮城の旧石器時代遺跡』を刊行しました（当館ミュージアムショップでも取り扱っています）。

スライドは私も関わった仙台市史から解説します。宮城県では、山形県地方が原産である良質の珪質頁岩を使用して、定形的なナイフ形石器などに選択的な製作をします。一方

で、宮城県の地元で採取できる石材は、粗雑な便宜的な石器を含めて、さまざまに利用されます。石英安山岩質、流紋岩質の各岩種、鉄石英、そして村田町の新川流域に原産地が知られている玉随質の原石などがあります。

東北大学の「最上川プロジェクト」

私が 3 月まで勤務していました東北大学文学研究科考古学研究室では、1984 年から山形県の後期旧石器時代遺跡の調査研究を、継続的に進めてきました。2020 年も、細石刃文化の代表的な遺跡である大石田町角二山遺跡を調査しました。歴代の教員、学生が実習活動を兼ねて続けてきました。「最上川流域の後期旧石器文化の研究」略称「最上川プロジェクト」として取り組んでいます。主に石刃石器群の調査成果を解説します。スライドが一部英語になっているのは、国際学会等での発信を重視しているためでもあり、ご了承ください。グローバルな館長講座ですので、雰囲気をお伝えしたいと思います。スライドの代表的な石器の編年図で、古い方から丸森 1 遺跡、上ミ野 A 遺跡の A 群と B 群（並行）、高倉山遺跡、白山 B 遺跡、白山 E 遺跡、角二山遺跡になります。

珪質頁岩の緻密な質の良さを見てください。石刃石核からの連続的な作業進行は、石核の方の微妙な調整（作業面や打面）によって確実となります。狩猟民の広範囲な移動生活の中では、持ち運ぶ石器材料の重量が負担となりますから、このような連続剥離方法は、定住生活の場合と比較して、より適合する方式です。山形県でも宮城県でも、縄文時代に入りますと、石刃技術のような重量軽減的連続剥離技術は、すたれていきます。一旦、高度に発達した石器製作技術が行なわれなくなるというのは、文化が退化したということではなくて、当時の生活様式全体のなかで、より整合的な技術組織に移行していったという解釈ができます。

「適応戦略」と「規準的文化観」

また、プロセス考古学に言う「適応戦略」adaptive strategy という堅い用語ですが、移動生活の方式・方策があり、同じ場所に戻ってくる「回帰型」、別々の場所をさまざまな目的で土地利用する方策、集団の一部が分かれて資源収集活動に携わる一時的滞在地などがあります。民族考古学と先史考古学との総合によって、いろいろな適応戦略の要素が、どのような考古学的な結果になるかという研究が進められました。

同じ時期で、同じ集団が残す遺跡は、多くの遺跡地点でさまざまな多様性を持つのだという、基本的な認識が重要です。ある文化が残す「標準的な遺跡」「標準的な石器型式の組成」というものは、この意味では存在しないといっても過言ではないかもしれません。プロセス考古学以前のアメリカの伝統的考古学は、このような標準を追求する「規準的文化観」normative view を原則としていました。ビンフォードが 1960 年代のニュー・アーケオロジーで強く批判したのは、考古学に根強くあった規準的文化パラダイムだったのだと、ご自分で回想しています。

フォレイジャー対コレクターという 2 類型

ビンフォードは、現在（近過去）の狩猟採集民諸族の、移動生活の様式を詳細に検討して、大きく二つの類型に分けることが可能であるとしました。フォレイジャー型と、コレクター型です。前者の例に、アフリカのブッシュマン（サン諸族）や熱帯雨林の移動民、後者の例に、アラスカのヌナミュート・エスキモーを挙げています。移動（遊動）の頻度、集団構成の違い、滞在地の類型が多様化すること、貯蔵行動の有無と程度、季節性と寒冷な環境への対応など、多くの分析を加えています。これらの区別は発展段階と考える学説もありますが、本来は環境諸条件と人間集団の適応形態の相異という、理論的な位置づけです。すなわち、文化進化の段階としては、同じ段階の中での多様性と考えることができます。この点を強調しますのは、後期旧石器時代についても、同時代の狩猟採集民として当然、両方のタイプの適応類型がありうるということだからです。

フォレイジャー型の適応は、滞在地キャンプを次々に移動していきますが、ベースキャンプと一時的活動地がセットになるパターンもあります。コレクター型では、拠点から出て回帰してくる行動と集団全体の移動がセットになるパターンが特徴的です。滞在キャンプと資源獲得地（狩猟キルサイトなど）のほかにも、多くの種類の活動地点がでてきます。

「石刃石器群のコレクター型適応」仮説

今回の館長学説として、石刃石器群の一部の集団は、コレクター型に類する適応形態を、既に確立していたという可能性を、指摘したいと思います。東北地方と西ヨーロッパに共通の可能性です。人類の文化進化に関わる、今後さまざまに論じてみたい重要な課題です。少し難しくて恐縮ですが、理論的な枠組みとして、フォレイジャーとコレクターの二分法は、諸民族がいずれかに分類される択一的なカテゴリーというわけではありません。漸移的な区分であり、ウエーバーなどの社会科学における「理念型」概念に近いと考えて良いでしょう。ですから、ある考古学的文化をどちらかに当て嵌めるということではありません。

多くの民族誌を参照して集成していき、H/G（ハンター・ギャザラーの略で、英語圏人類学での基本略語、「狩猟採集民」）の生業活動や移動方式のさまざまな特質を、環境的ないろいろな条件と関連させて、法則性を探り、考古学資料を残した個別の諸文化を、文化生態学的に理解していくという方向性があります。環境条件の代表的な要素として、ビンフォードは ET（有効温度。年間日射熱量の総量と、季節による偏りを合わせて数量化するもの）という指標を用いて考察しています。

資源の均質な分布と偏り（偏在性）のある分布、空間的な偏りと時間的な偏り（前者は地理的領域の中での分布のパターン、後者は季節による豊富と欠乏のサイクルや越冬問題など）も、重要な要素です。一方、民族文化の側の行動様式としては、貯蔵という活動の有無と程度、滞在地を移動する頻度と距離、集団構成の変化の様相（バンド集団の離合集

散など)、そしてロジスティック方式と名付けた資源収集方式の有無と程度、などが挙げられます。ロジスティック方式は、集団全体から一部の構成員が、特定の資源獲得の目的で出向いていき、しばしば居住地点とは別に滞在地点を設けて、獲得できた資源から集団へ持ち帰るといった行動です。

東北地方の後期旧石器時代の後半、石刃石器群の時期について考えますと、山形県と宮城県を舞台にした、コレクター型適応システムの要素が認められるようです。他の県や地方については、地形も資源も個別性があり、それぞれの地域資料で考察が進められるべきですが、頁岩地帯の東西という地域例は、参考になると考えます。

奥羽山系の東西での、良質な石器石材の移動の状況は、「埋め込み戦略」を考慮すれば、人間集団の、確立していた移動パターンの一部を反映していると考えられます。「良質」とは、目的とする石器製作に適合する度合いについてであって、善し悪しという私たちの価値判断ではありません。原石の重量に対しての有効な刃部供給を多く確保できる、発達した石刃技法は、広範囲の移動を計画的に組み込んだ居住様式に整合するものでした。石刃連続剥離のための石核の微調整や、石刃に二次的加工を施して各種型式の利器に製作していくシステムは、高度な熟練と良質石材の調達をセットとして前提とするものでした。宮城県地方では、便宜的な種類の石器は在地採取できる石材で製作され、珪質頁岩と在地石材の石器の組み合わせが認められます。

宮城県地方での、遺跡の構造の状況を見ますと、一時的な滞在キャンプの様相が大きい遺跡が目立ちます。装備の補修と入れ替えが行なわれています。富沢遺跡の焚き火周辺での、ナイフ形石器の補修と入れ替え、在地の石材を用いた石器素材剥片の製作、山田上ノ台遺跡での在地石材の接合資料など、事例をあげることができます。主要利器が良質の珪質頁岩で製作された上ノ原山遺跡上層、野田山遺跡、薬莱原 No.15 遺跡（石刃石核の接合資料もあり）などがあります。薬莱山麓遺跡群は、奥羽山系を越えて山形へ結ぶルート上にあります。

後期旧石器時代前半の適応形態

後期旧石器時代の初期から前半については、後半の発達した石刃石器群とは異なる様相が認められます。遺跡数は多くはありませんが、上ノ原山下層、薬莱山 No.17 遺跡などがあります。石材は玉随など在地性が多く使用されます。

東日本の環状ブロック群の時期になりますが、適応形態については、さらに検討が必要でしょう。大形動物の狩猟と、集団全体が円形の滞在キャンプを形成して、ある程度の期間を生活していたと考えると、集団移動のパターンが季節や資源の組み合わせによる計画的なパターンであったかどうか、今後の課題と思います。日本列島の環状ブロック群は、世界的にも目立つ現象です。その性格については、学会でも何度もシンポジウム等が行なわれていますので、各遺跡における人間行動の復元と、遺跡ごとの多様性の検討をさらに進めるべきでしょう。

いずれにしましても、二つの概念的カテゴリーにあてはめて考えるということではないという趣旨は、詳述しましたところです。マードックは、15 世紀末の地球上で、狩猟採集民が、どのように分布していたかをまとめています。H/G の多くは、極限的な環境を含めて、いわゆる周辺的な地域で生活していたことは、歴史的な事実でした。民族考古学が「辞書編纂」のような分野であるとしましても、民族誌的アナローグが存在しないような環境地域も多くあります。その代表的な環境として、西ヨーロッパの後期旧石器時代を考えることができます。中緯度で日射量が多く、寒冷な気候で、多様なモザイク状の植生があり、大形動物資源（トナカイ、ウシ科のヤギュウとオーロックス、ウマ、アカシカ）が豊かでした。そのような環境での狩猟採集民は、すでに消滅しどこにも存在しません。

個別のアナローグを求めるのではなく、民族考古学においては、環境的諸条件と、適応様式との関係を法則化して理解し、その原則を援用して、考古学的な個別の文化を考察していくという方向が重要なのです。

おわりに

東北地方に豊富に存在する石刃石器群の遺跡を、グローバルに評価してみようということから発展させ、そのためには当時の人間集団の適応形態を考察するという課題におよびました。石器を、石器だけから説明するのでは十分でなく、それらがどのような生活の必要性から生み出されたのか考えていくことが重要です。居住地と環境、そして移動と滞在のサイクルなど、発達した狩猟民社会の生活様式のなかで、石刃石器群の時代を考えてみました。奥羽山脈の東側と西側での事例研究を紹介しました。石器の材料となる原石の状況、遺跡における搬入、製作、調整と補修、廃棄などを、石器の空間分布や遺構との関連で考察する「遺跡構造分析」と総合して考えることで、人々の生活に迫っていくことが可能です。東北地方の石刃石器群を残した人々は、ビンフォード理論による概念の「コレクター・タイプ」にあたる居住様式を確立していたのではないかとの仮説を提示しました。今後、専門家の皆さんと検討を深めていきたいと考えています。

今回は時間の関係もあって東北地方の事例を中心に解説しました。次回は、西ヨーロッパのマドレーヌ文化期の遺跡や美術を中心に、同じ視点で考えてみたいと思います。クロマニョン人が、ラスコーの洞窟壁画を残した、ちょうどその頃のことです。暑い季節ですが、またお運びください。

（付記：今回の概要は、時間的なことや難解の度合いもあり、かなり理論的な部分を補足しました。当日は、具体的な資料を主に解説しました。また各回の参考文献は、図書館その他で比較的入手しやすく、一般向けのものを主にしています。個別の文献引用は省略しておりますことをご了承ください。）

参考文献

阿子島香（1983）「旧石器文化の復元に民族誌はどう活用できるか」鈴木公雄・石川日出志編『新視点　日本の歴史１原始編』所収。新人物往来社。

泉択良・上原真人編（2009）『考古学－その方法と現状－』放送大学教育振興会。（阿子島分担執筆）。

仙台市史編纂委員会編（2005）『仙台市史　通史編１原始　旧石器時代（改訂版）』（阿子島分担執筆）。

宮城県考古学会旧石器部会（宮城旧石器研究会）編（2018）『宮城の旧石器時代遺跡』宮城県考古学会刊。